Ⅰ　個別援助事例

1　ＱＯＬの向上　～介護の喜びを得ること～

1　プロフィール

⑴　氏名・性・年齢	Ｓさん（女性・95歳）
⑵　入　所　年　月	平成20年9月入所
⑶　現在の心身の状況	要介護度4、認知度Ⅲ

2　事例の概要と、この事例を取り上げた理由

平成20年９月に入所されたＳさんは、ベッドからの転落の危険性があり、マットレス対応であったが、昼夜問わず不安になられるようで、頻回にはい出しがあった（つかまり立ちはできるが一人で歩くことはできない)。

胸椎圧迫骨折などの後遺症のためか、頻回に痛みの訴えがあり、声掛けや腰をさするなど対応した。また、車椅子からの立ち上がりもよく見られ、入所前に車椅子から転倒し骨折した経過もあり、危険性を考慮して声掛けはもちろんのこと、家族の希望のもと、車椅子のベルトを使用して安全性のみを重視した対応をとる。

まず、身体拘束という点から考えられる車椅子のベルトを使用していることは、立てないようにしたことであり、介護者が介護しやすいように用いられたものである。本人の尊厳が失われるため、車椅子のベルトによる拘束からの解放を試みた。

そのためにも、Ｓさんの発する言葉に耳を傾け、行動に寄り添い、落ち着いて生活できるよう対応してきた結果、自立が促され、はい出しが軽減し、痛みの訴えも減り、車椅子のベルトでの拘束もなくなったことについて経過を報告する。

3　援助経過の要約

なぜＳさんが立ち上がりたいのか、また、どうしたら安全に生活が送れるのか、担当介護士だけでなく、スタッフ全員で何度もアセスメントとカンファレンスを行った。Ｓさんの発する言葉や行動に寄り添った。また、機能訓練士の指導のもと、ＱＯＬ向上に努めた。

(1)　初期の状況

家族の希望にて、ベッドからの転落を防止するため畳対応となるが、当施設では畳部屋がないため、Ｓさんの居室の一画を畳部屋に改装する（入所され２か月後)。

入所された頃は胸痛と腰痛の訴えがあり、「どこもかしこも痛い、どうしよう」と、痛みと共に不穏症状が頻繁にみられる。痛みの訴えがひどいときは、痛み止めの座薬を使用し居室で休んでいただいた。

車椅子を自操されホール内を徘徊し、頻回に立ち上がりが見られ、転倒の危険性が高く、そのため車椅子のキャッチベルト（家族も同意）を使用していた。

排尿（尿取りパットのみ使用、夜間も同様）時は、つかまり立ちが可能と分かり、トイレ誘導、一部介助にて行った。

夜間は、センサーマットを使用し、トイレ誘導以外に、はい出しが多く見られた。「どうしましたか？」と伺うも、「眠くない」「どうしたらいいのか分からない」などの不穏状態が続き、スタッフルームで過ごされ、朝までスタッフとすべての行動を共にすることが、毎日のようにあった。

機能訓練は、歩行訓練を平行棒にて行い、調子がいい時はゆっくり一往復できた。訓練に至るまで気の進まない日や腰などの体痛がある時が多く、実施できない日もあった（機能訓練士より)。

(2)　中期の状況

車椅子のキャッチベルトが気になるのか外そうとする行為が見られ、頻繁に「取ってください」と訴えるようになる。カンファレンスにて不穏緩和のため、スタッフ全員で見守り強化のもと、マジックタイプのベルトが付いた車椅子に変更してみる。

車椅子交換後、マジックタイプのベルトは、すぐに自ら外すことができたので、不穏症状は、だいぶ

軽減された。自操したり立ち上がりもよく見られたが、ますますの見守りが必要となり、ベルトを外したら、気が付いたスタッフがすぐに装着した。

その後、Ｓさんは、手を使ってこぐのではなく、足を使って上手に自操を行うことができるようになった。足を使って自操する時、車椅子のブレーキを掛けたままだと体だけが前に滑り車椅子からずり落ちそうになるので、転倒回避のカンファレンスで、自操時はベルトやブレーキを掛けず、職員全体でＳさんを見守り対応していくことに決め、観察を行った。

スタッフ全員で観察した結果、立ち上がりや足での自操時にフットレストが降りていると、つまづいて危ないと気づき、フットレストを常時上げるようにする。

Ｓさんが自操しやすくなり日中の動きも活発になり、夜間のはい出しや不穏症状が軽減されつつあった。

また、Ｓさんは夜間に肘や足を使ってはい出していたが、四つんばいではい出すようになった。そのため、はい出しが見られた時、車椅子をＳさんの頭側に設置し、座面に肘をつけて立ち上がれるよう声掛けにて誘導した。

すると、ゆっくりではあるが両肘を座面につけて立ち上がることができた。そこから、腰を支えながら肘掛に手を移して腰きり動作を手伝うと、上手に旋回し車椅子に移乗することができた。また、ブレーキを掛けて腰を曲げ床に手を付き四つんばいになると、一人で車椅子から降りられるようになった。

カンファレンスでは、Ｓさんの身体能力を安全に生かすためにどうしたらよいのか話し合い、本人にあった低床車椅子にしたらどうかと意見がでた。

デモ機使用により、自操から移乗までをスムーズにできるようになることが分かり、家族に同意を得て、フットレストのない低床車椅子に変更した。

この段階で、Ｓさんへの拘束は一切なくなったが、転倒の危険性があるため、スタッフ全員で見守り・所在確認の強化に努めた。

(3) 現在の状況・今後の見通し

居室に畳を入れて布団を敷いたことによりベッドからの転落という危険性は解消され、Ｓさんが気持ちよく横になれるようになった。

危険回避とはいえ、結果的に拘束となっていたキャッチベルトを外し、マジックベルトとなり、その後ベルトは一切なくなった。それはＳさんの不穏行動を増幅している要因がベルトであると気付いたからである。

また、ベルトを外したことにより、Ｓさんの本来の車椅子の使用の仕方が観察の中から分かった。フットレストを外し、体に合った低床車椅子に変えて、Ｓさんが快適に生活しやすくしていった結果、生活リハビリにつながりＱＯＬが向上した。

車椅子の使用方法は取扱説明書に書いてあることが全てではなく、基本を忠実に順守した上で、使用する方の状態によって、用い方が変ることをＳさんに教えられ、その使用方法が危険回避につながると分かった。

現在Ｓさんは、ご自身にあった車椅子でホール内を自操し、いろいろな職員と会話をしたりして落ち着いた生活を過ごされている。そこには、担当スタッフのみならず全職員への周知のもと、所在確認・見守りを徹底した経過がある。

不穏や体の痛みを訴えることもあるが、初期に比べて大幅に少なくなり、スタッフの声掛けで、落ち

着くようになった。現在、体痛に用いられた座薬の使用は一切ない。

日中よく行動されるためか、夜間はぐっすり眠れるようになり、居室からのはい出しは減ったが、入所前にもあった一人で寝ることの孤独感により、不安を訴えるので、現在はスタッフルームの一隅に布団を敷き就寝していただいている。

4　評価と反省

介護現場において、安心・安楽な生活とは「安全」が何よりも大切であるが、安全を支援する上で、行動を抑制することが「安全」につながるわけではないと実感した。

一人ひとりの利用者にあった対応をすることは、忙しい介護の日々の中で、時として難しいこともあるが、今回、Ｓさんが不穏になられることが軽減できたのは、なぜ不穏になるのかを担当者のみならず、スタッフ全員で対応したからである。結果として利用者一人ひとりに気持ちよく生活していただくことが、危険の回避にも、介護者の負担の軽減にもつながる。

日常生活の中に、機能訓練士の協力のもと生活リハビリを取り入れ、Ｓさんと共にＱＯＬが向上していく様子に、介護者として大きな喜びを感じた。

ただ、初期状態のようにＳさんを拘束して、辛い思いをさせてしまったことについて、とても後悔している。

Ｓさんに教えていただいたことを、新しく関わる利用者に応用し、拘束がないその人らしい生活を支援していきたい。

Ⅰ　個別援助事例

2　オムツからトイレへ

1　プロフィール

(1)　氏名・性・年齢	Aさん（女性・91歳）
(2)　入　所　年　月	平成23年2月入所
(3)　現在の心身の状況	要介護度5、認知症度：軽～中度

2　事例の概要と、この事例を取り上げた理由

入所時より昼夜オムツ対応となっていたが、座位がしっかりとれるということと、本人がまれに「トイレへ行きたい」と希望されるため、日中トイレ誘導で対応させてもらった。

オムツを外すということが、不快感なく穏やかに生活していくことにつながったと考えられ、この事例を取り上げることとした理由である。

（夜間帯は、本人「寝ているのに起きるのはしんどい」とのことで、オムツ対応とさせてもらっている）

3　援助経過の要約

(1)　初期の状態

入所時より昼夜オムツ対応となっていたが、座位がしっかりとれるということと、本人が「トイレへ行きたい」と希望されることがあったため、日中トイレ誘導で対応させてもらうこととする。

一番は、オムツを外すとともに、本人に「トイレに行ける」という自信や安心感をもってもらえる、ということと、もともと臥床時間が長く、昼夜逆転気味で夜間不眠のことが多かったため、それらの改善を目指すこととした。

当施設では、日中の定時の排泄介助は基本は食事後（当時）となっていたが、排泄状況を把握するた

めに、定時の排泄介助と排泄介助の間、そして訴え時にトイレ誘導して尿量を測る。また、睡眠状態を把握するために、覚醒しているか入眠しているかを大まかに確認し、それぞれを専用の排泄日誌へ記入することとする。

（実践結果）

開始前はトイレ誘導を了解されていたが、いざ開始すると「しんどい」「もう行きたくない」と訴えることが多く見られている。パットの中に排尿が出ていることが多く、トイレ内には少しだけでるという状況。離床するのがしんどくて嫌がることも多くみられている。また睡眠時間は、短時間入眠し短時間覚醒する、という睡眠のリズムを把握できた。

(2) 中期の状況

日々、トイレ誘導を行っていくことによって、徐々に離床時間を確保でき始めている。トイレへ行くことを拒否されることが少なくなっていき、パット内への排尿とトイレ内での排尿は半々といった感じとなる。

また、徐々にではあるが、夜間に入眠され、しっかり休まれることが増えてきている。本人が自発的にトイレの訴えをするのはまだ少なかったため、尿意（便意）を感じた時に職員に言ってもらうよう、その都度声掛けすることとする。

日中のトイレ誘導の回数や方法は継続し、尿量や睡眠状況を排尿日誌に記入するのも引き続き継続とする。

（実践結果）

パット内の排尿は徐々に少なくなり、トイレでの排尿が多くなってきている。

自発的にトイレを訴えられることが多くなってきており、トイレへ行くことを苦ではなくなってきたように感じられる。

離床時間も以前に比べて車椅子に座っていれる時間が多くなってきている。

(3) 現在の状況・今後の見通し

現在は、食事前にトイレ誘導しており、およそ10時～11時の間と夕方のオムツ対応前の計５回、プラス本人希望時にトイレ誘導を行っている。

自発的にトイレを訴えられることも多くなっており、「起きるのがしんどい」という気持ちよりも、尿意や便意を感じた時に「トイレへ行きたい」という気持ちの方が強くなっているように思われる。

排尿はパット内に出ていることもあるが、初期の頃に比べて少なく、トイレに座った時に排泄があることが多い。

夜間もその時の精神状態によるが、良眠されることが多くなってきている。

今後も引き続きトイレ誘導を行って、現状を維持し、本人が行きたい時にトイレへお連れできるよう対応していきたいと思う。

4　評価と反省

オムツにさせてしまいがちだったが、立位がとれなくても二人介助でトイレへ座ってもらうことができるため、ある程度の座位が保てればトイレ誘導は可能だということが理解できた。訴えがある方も積極的にトイレへ座ってもらい、少しでもオムツが外れる時間があることで、今まで行ってきた排泄の形となり、

より人間らしく生活していくことができると感じた。

だが、今回の介助経過の初期の段階も含め、トイレに行きたくない方を無理にでもトイレへ連れて行くことが「果して本当にその方のためになるのか」と感じることもあった。

「服が濡れると着替えないといけないから」「排尿量を調べないといけないから」トイレへ連れて行くというのは、結局は介助者の負担を減らすために行っていることで、利用者本位ではないのではないだろうか。

服が濡れたら気持ち悪いと感じるだろうが、トイレを拒否している時はその方の本心だと思う。もし失禁してもその方が拒否をされたのだから、トイレへ行くことよりも服を着替えてもらった方が、その人のためではないかと感じることもあった。

そこの兼ね合いも含めて、他の方でトイレ誘導できそうな方がいれば、誘導していきたいと思う。

Ⅰ　個別援助事例

3　いつまでも私らしく　～心に寄り添って～

1　プロフィール

(1)　氏名・性・年齢	Aさん（女性・79歳）
(2)　入　所　年　月	平成22年10月入所
(3)　現在の心身の状況	要介護度4、認知症度Ⅲ

2　事例の概要と、この事例を取り上げた理由

自施設に入居してから、食事中に急に大きな甲高い声で叫び、お皿をお箸で叩いたり、泣き出す、怒り出す、機嫌が悪くなる。突然、他の入居者や職員を叩いたり、蹴ったりすることもあり、トラブルが絶えない。感情が高ぶってくると、食事の席を立ってふらっとどこかに行ってしまい、声をかけるとさらに興奮されるので、落ち着くまで様子をみる。機嫌が直るまでに時間を要するので結局、食事をあまり食べられないといった状況。

ユニットスタッフの中で「Aさんの暮らしはこれでいいのか、Aさんらしさとは何だろう」ということが疑問として浮かび上がっていたが、具体的に何をどうすればいいのか分からなかった。ユニットリーダーとして他職種を巻き込んで、Aさんの紐ときを行ったところ、Aさんらしさを取り戻すことに成功したので、今回事例に取り上げた。

3　援助経過の要約

(1)　初期の状況

初期のケアプランは「皆でおいしく食事をする」「皆で楽しく過ごせる環境を作る」といったニーズを挙げていた。

そして、皆で一緒の席に着き食事をする環境、日中も皆で過ごせるような環境を作っていた。しかしＡさんはイライラとしていることが多く、食事中は他の入居者のせきやむせこみに対しては「汚い、あっちへ行け」と暴言を吐き、足が当たれば「痛いなー」と怒り、手を上げたりしていた。

そして機嫌が悪くなるとそこからは、どんな声をかけて色んなアプローチをしてもなかなか機嫌は直らず、食事は進まなくなるので食事量は少なく毎食３割程度であった。

上記のため、職員のストレスも大きく、Ａさんにはできるだけ関わらない方がいいのではないかと考える職員もおり、Ａさんと職員の関わりは薄くなっていきつつあった。

そこで、家族からの情報をもとに、看護師と精神科医を交えてＡさんの対応を一緒に考えていった。

家族の面会時に、困っていることを素直に伝えて相談をしたところ、Ａさんはお米が好きでなく、パンやうどんを主食として生活してこられたこと、にぎやかな雰囲気が苦手で１人で静かに食事をされていたことなど、新たな情報をたくさん得ることができた。

そして、「皆でおいしく食事をする」「皆で楽しく過ごせる環境を作る」と立案していたプランは本人に合っていないことに気付き、本人にとっては苦痛に近いものだったのではないかと考えた。

(2)　中期の状況

自施設は個室なので、食事は部屋で静かな環境で食べてはどうかと考えて試してみたところ、とても穏やかな表情で食事をし、食事量も毎食ほぼ全量を食べられるようになっていった。以前のような大声で叫ぶ、他者に対する暴力などの行為が減っていった。

そこで自施設で行っている24時間シートに落とし込んでいき、職員間でぶれないようにケアの徹底を図った。

日中、他の入居者と関わる場合には職員が間に入り、コミュニケーションが円滑にとれるように支援している。

プランはニーズを「静かな環境の中で、落ち着いて食事をしたい」へと変更する。

(3)　現在の状況・今後の見通し

現在は毎食部屋で静かに食べており、普段の生活でも笑顔の場面が増えている。しかし、ついつい部屋で過ごす時間が増えて運動不足が目立ち、体重が増加しつつあるので、生活の中でのリハビリを取り入れていかなければならないと感じている。

プランの変更により、Ａさんらしく本人の望む生活が送れるようになったと考えられる。

4　評価と反省

初めは「Ａさんは難しい人」という職員の思いを変えていき、Ａさんらしく暮らしてほしいということが取り組みのきっかけであった。

ユニット会議などを活用してみんなで、マンダラート方式でＡさんを分析していった。

・職員に自分のことをもっと気にかけてほしいのではないか

・大きな音や耳障りな音が気になり、イライラして不安定になるのではないか
・偏頭痛や便秘が影響しているのではないか
・認知症はあるが、クリアな部分もあり、はざまで混乱しているのではないか
と分析していった。

他職種と情報を共有していくのに、日々のケース記録と、24時間シートを活用してＡさんの発言や、どういった時に機嫌が悪くなったか、そのきっかけを探るようになり、Ａさんのケース記録はユニットスタッフの意識によってどんどん充実したものになっていった。

また生活を24時間軸で見るようになり、今まで見えなかった部分も見えてきた。

家族から得た過去の情報、ユニットスタッフが日頃関わりの中で集めた現在の情報、精神科医の助言を踏まえて、再度ユニット会議の場でＡさんについて「自分だったらどうか」と常に自分と置き換えながら、みんなでケアを決めていった。

対応としては、食事は３食とも部屋で食べられる環境を作る、機嫌が悪くなった際には対応する職員を変える、話しかける声のトーンをＡさんのその時々に合わせる、昼食は昔から大好きであったうどんを出すということにしてみて、Ａさんの反応がどうであったかということを日々記録、Ａさんの対応を24時間シートを活用して徹底して行っていくことで、２，３か月でＡさんは目に見えて変わってきた。

食事量が格段に増えたこと、それ以外でもＡさんの心の安定は見えてきた。

笑顔でいることが増え、会話が成立することも増え、そしてフロアで過ごす時にも甲高い声を出したり、急に泣き出したりすることがなくなった。

まさにAさんらしさを引き戻せたと感じ、それと同時にユニットスタッフの意識も変化していった。

他職種で話し合って決めたケアで入居者が変わり、その人らしく暮らしていくことができるようになったということで、自信につながり、また、大きなやりがいを得ることができた。

そして、みんなで一丸となって取り組んだことでチームワークも強くなった。

Ⅱ　集団援助事例

4　個別対応の意味

1　グループ活動の名称

「個別ケア委員会考案の希望対応シート」

※企画、実施するのは全職員（担当を受け持っている職員）

2　この活動を取り上げた理由

利用者の方々全員に個別対応ができるよう、また専門性を有した対応を行うことを目的として作成した「個別対応シート」。活用から１年が経過し、見えてくる課題と評価を行い、見直すことで今後の活動につなげたいと思いテーマに上げる。

3　活動経過の内容・評価と今後の課題

当園では利用者が外出を希望されれば希望に沿った対応を行っている。外出以外でも買物の代理購入や園で提供している食事ではなく「カップラーメンが食べたい」と訴えられたら食事にカップラーメンを提供するなどできる限りの範囲で対応している。ただ、利用者全員が同じように訴えられる訳ではなく、そのような対応は会話が可能な方のみに行っており、また、会話が可能でも遠慮をされてなかなか訴えることができない方もおり、個別対応を行う利用者に偏りが見られていた。個別外出を行っても専門的対応はなく、「出かけたい」と思う背景には何があるのか、外出することで本人にどのような変化が生じるのかなどの考慮が欠けており、「出かけたい」と訴えられたら個別外出するだけの状態であった。そういった状況を打破するために専門性を有した個別外出、ＡＤＬが高い低い関係なく、利用者全員に個別対応ができるシステム構築を考案していくことになる。まず、企画を個別ケア委員会に提案し検討することになる。個別ケア委員会とは、　　　　　老人福祉施設協議会が主催している個別ケア部会研修会に参加し、他施設での取り組みや研修で得た知識を園に還元し、利用者の生活の質の向上を目指すことを目的とした委員会である。委員会に企画を持ち込み検討した結果、問題となったのは以下の通り。

①利用者全員にどのように個別対応や外出を行っていくか

②自ら訴えることができない方には、いつ実施するのか

③自ら訴えることができない方にどのように本人の気持ちを汲み取り形にしていくか

まず、①と②に関しては誕生日に実施することで解決する。希望を口にされる方はその都度対応していくが、訴えることができない方は、年に一回必ず迎える誕生日で、利用者全員に実施できることになる。「利用者の個別対応は一年に一回でいい」ということではなく、初めての試みということもあり誕生日には必ず実施するようにという意味合いと誕生日という特別な日に自分の好きなことを行ってもらいたいという意味も込めている。③に関しては事前に得ている情報、例えば嗜好や趣味、また利用者の生活歴や家族から情報を得て、担当職員が「本人の好きなこと」を代弁し形にしていくこととしている。以上のことを踏まえ作成したのが「希望対応シート」である。内容としては個別対応を行うにあたり事前提出するもので対応の内容などを記入するシートである。なお、希望対応シートは実施前に提出するものと実施後に

提出するものの２種類がある。実施後に提出するシートの内容は、主に実施中の様子や今後の課題を記入するものとなっている。以下は希望対応シートに記載する項目と詳細である。

Ａ）企画・案（実施する個別対応を記入）

Ｂ）企画までの経緯（企画を考案するまでに至った経緯を記載）

Ｃ）企画の詳細（実施する内容を細かく記載）

Ｄ）実施に掛かる予算（実施するにあたり掛かる予算を記載）

Ｅ）必要な物品（実施するにあたり必要となる物品）

Ｆ）実施することで期待すること（実施したことで本人にどのような日常生活でのメリットをうみ出せるか。実施中、どのように過ごして欲しいか）

以上が実施する前に提出する希望対応シートの詳細である。次に実施後に提出する希望対応シートの詳細である。

Ｇ）実施中の様子（個別対応中の様子を記載。ケース記録と連動）

Ｈ）実施しての課題（個別対応を実施してみて気付いた課題と反省を記載）

Ｉ）今後について（実施した結果、利用者の様子や発言をもとに今後の個別対応にどうつなげていくかを記載）

以上が実施後に提出する希望対応シートである。希望対応シートを実用してから外出、個別対応を行う機会は確実に増えている。誕生日に実施ということから家族との誕生会を実施するという個別対応が多い傾向にあるが家族にも喜ばれている。特に利用者と家族が一時帰宅を希望された際などは特に喜ばれている。ある利用者が職員に「家に帰りたい」と訴えたことがあった。すぐに家族にその旨を伝えると「家に一度、連れて帰ってやりたいけど面倒を見られない」と言われた。帰宅中は職員が付き添えることを伝えると、驚かれながらも「それならばお願いしたい」ということで自宅外出が実施されたこともあった。ちょっとした些細な家族との会話のやりとりではあるが以前ではこういった家族とのコミュニケーション自体が少なかったため、希望対応シートの一つの成果と思われる。これから希望対応シートを活用し実施した個別対応の一部を紹介していく。

Ｈさん（男性・90歳）

普段は自室で休まれていることが多く活発な方ではない。家族に誕生会を催したいことを伝えると「正月に家に連れてあげられなかったので是非参加したい」とのことであった。内容は大きな催しではなく家族と一緒に食事とケーキを食べるといったささやかなものであったが、「100歳まで生きるか」と笑いながら話されていた本人の姿が印象的であった。その後、Ｈさんは肺炎で亡くなり「100歳まで生きる」という目標は叶わなかったが人生最期の誕生日を家族と過ごせたことは幸せだったのではないだろうか。また、このことで利用者に「また今度」は無いということを感じた。家族も「こんなに元気なお父さん久々に見た。また来年も祝えたらいい」と言われていたが肺炎が原因で次の誕生日を迎えることができなかった。

Ｏさん（女性・76歳）

歩行、排泄、食事どれも自立されている方ではあるが、園内では行動活発なことはなく日中はほとんど自室でテレビを観て過ごされている。ある職員が以前から野球中継を観ているのに気付き野球の話を持ち出すと「昔から野球観るの好きなんです」と言われる。その後も野球の話をしており、職員が「野球観に行ってみるかい」と尋ねたところ、驚きながら「行けるんですか」と言われる。この方も外出は年に数回は出かけられていたが行き先は車で30分ほどの隣町など比較的近距離の外出が多く、本人も片道２時間掛かる　　ドームに行けるとは考えていなかった様子。驚きながらも「是非行きたいです」とご本人からも

言われ外出の企画に至る。ただ遠出をするにあたり排泄場所や体調を崩すなどのリスクがあり入念な計画が必要となった。事前に　　ドームまでのルート確認と排泄場所と箇所の確認、また小休憩をとれる場所の確認を行い移動までの疲労緩和に努めた。また最後まで観戦すると観客が一斉に帰ってしまい事故に見合す可能性もあり、本人に了承のもと7回途中で帰園するなどの配慮を行い対応。その結果、無事に観戦し帰園することができた。祭日ということもあり大勢の観客が来ており観客の多さにとまどいの様子も見受けられたり、予想以上に選手やプレーする様子が観やすかったのに感心されたりとさまざまなことが刺激になったと思われる。さすがに疲れも伺え帰りの車中は傾眠されていたが、帰園後「ありがとうございます。楽しかったです」と笑顔で言われていた。また遠出をしたことで本人も自信につながったのではないかと思われる。

以上が希望対応シートを活用した個別対応の一部である。そのほかにも浮腫みのある方にはマッサージを施行したり、ある方は職員が仮装をしてカラオケを唄ってほしいとの希望をされ実施したりと個別の対応はさまざまである。希望対応シートを活用して約1年になるが見えてきた課題もある。

Ⅰ）訴えることができない方に対しての個別対応は果たして本人が満足されたのか

Ⅱ）外出中の緊急時の対応をどうするか

まずⅠ）に関しては「利用者本人の情報を基に本人の気持ちを汲み取り形にしていく」となっているが、それらがどの程度達成できているかの評価が難しく、対応中の本人の様子から汲み取るしか方法がない。満足して頂ければ嬉しいが望んでいないことを押し付けられると苦痛でしかなくなるため、個別対応を企画する際は今後も十分注意していく必要がある。

Ⅱ）に関しては外出中のトラブルは現在ないが、今後、十分起きる可能性がある。持病、たとえば発作や高血圧による眩暈などが起きた際はどう対処するのか。または交通事故にあった時はどう対応していくか。そのことから外出時の緊急マニュアルを作成する必要があり早急に対応していきたいと思っている。

個別対応シートを活用し1年になる。利用者の方々が満足して戴けるよう職員全員が取り組んで、利用者や家族に喜んでもらえたこともあれば大きな成果がなく終えてしまったこともある。その経験を今後、利用者の方々に満足して戴けるように活かしていければと思っている。

個人的意見であるが、「生きる」ということは自己決定の連続の上に成り立っているものと思っている。自分がしたいことや思ったことを行動に移すのに本来、障害というものは存在しない。しかし高齢者施設などは集団生活であり、どんなに工夫してもある程度の生活の縛りというものがある。たとえば入浴時間が決まっていたり出かけたい時に出かけられなかったり食事のメニューが決まっており食べたいものが食べたい時に食べられなかったりというのが施設での生活の縛りに含まれるのではないだろうか。そういったものを少しずつ可能な限り自己決定できる対応をしていくのが私たちの役割と思っている。個別対応も同じで利用者の方々全員が同じ気持ちでいることはなく、100人いれば100人の想いがあり、それに気付いてあげられる技術を持ち合わせられるよう努力していく必要があると感じている。

Ⅱ　集団援助事例

5　被災地において施設が地域に貢献できること

1　グループ活動等の名称

「地域福祉連携会」

2　この活動を取り上げた理由

昨年3月11日に発生した東日本大震災の津波により甚大な被害を被ったため、全国各地からさまざまな支援をいただいている。そのような中で、私たち地元の社会福祉法人は、甚大な被害を受けた地域社会の福祉環境を確保すべく、地域社会の中にある福祉ニーズに応えるとともに、施設入所者が地域の一員として暮らすための介護環境のあり方について、地元の社会資源が一堂に集まり、新たな福祉環境の再構築を図るべく活動を行っている。

今回、この実践を紹介し、さまざまな視点からの気づきや助言をいただく機会になれば、さらなる活動の充実と被災地の早期の福祉環境の復旧復興に資するものと考え取り上げるものである。

3　活動経過の概要

施設の理念には「地域社会との連携」を掲げ、当施設に住まう方々も地域活動へ参加することにより、地域の住民として役割を持ち、生きいきと暮らしていくことができるよう、関係機関と協働して取り組んでいる。施設はとかく入居者とその家族・親戚の方々とのかかわりが中心になってしまいがちであるが、こうした状況を乗り越えるために、地域で暮らすお年寄りの一人として地元の住民と行き来のできる、地域のどこにでもある普通の関係を保つための模索をしている。

これまで実践してきた事例としては以下がある。

（ワイン教室）

これまで閉鎖的にとらえられてきた施設と地域の垣根を取り払うべく、1階ロビーを開放しワイン教室を開いた。

本事業では、地元の景観という社会資源とボランティア団体を活用した。

1階ロビーからの景観は美しく、夕暮れ時の空の色の移ろいやテーブルに灯されたキャンドルの灯りの揺らぎは、被災地の日常から「今」を切り取ったようなひと時であった。

当施設にお住まいの方々とはかかわりの薄い若い世代を対象として、ソムリエの協力を得てワインの楽しみ方を教えていただくとともに、「非日常」を体感することにより福祉施設への先入観を払拭し、今後、日常的にかかわりを持つためのきっかけを作ることを目的としたのである。

私たちにとっても初めての試みであり、何からどのように準備を進めれば良いのか試行錯誤を繰り返しながら、何とか形にすることができた。その過程には、社会福祉協議会や被災地でボランテ

ィア活動を行っている団体、そして地域住民の協力が大きな役割を果たした。
一施設だけでは解決することのできないことも、多数の力が合わさることによりスムーズに進めることができた。それは、ハード面での問題、人的な問題、経済的な問題など、多くのハードルを越えるたびに、これこそが「協働」なのだ、という実感を得ることができた貴重な体験であった。
このワイン教室は、地域の方々にとってだけではなく、私たちにとっても地域を視野に入れる大きな機会となった。

（のど自慢大会）

さらに、地域で行われたのど自慢大会へ参加している。一部の入所者ではあるが、のど自慢大会会場でステージに立つ機会を得た。その際には、地域の方との再会があり、遠い日の思い出や震災時の苦労話、そして今の暮らしに至るまで話は尽きることはなかった。
これまでは、施設で生活をしているが故に、特別視されてしまうことが多くの場面で見られてきた。
しかし、我々が目指すものは「地域の一人として、普通に過ごす暮らし」なのである。施設で暮らしていながらも、自宅で暮らすことと同じように近所づきあいがあり、お茶のみを誘い合い、他愛もない日々の出来事を伝え合うといった日常を重ねていきたいと考えている。のど自慢大会への参加は、その「日常」にたどり着くためのきっかけであったであろうと思っている。
この活動は、地域住民・社会福祉協議会・グループホーム・老人保健施設・特別養護老人ホームといった関係機関との協働があったからこそ実現したものである。

（交通安全運動街頭啓発）

また、施設前のバス停留所からスクールバスで小学校に通う児童がいることに着目して、春の交通安全運動街頭啓発に参加した。地域の婦人部の方や青年部の方、地元警察署の交通課長さんなど、多くの方と一緒に活動を展開した。
この活動は、福祉関係機関がスクールバスのバス停付近で、交通安全の啓発活動として、地区全体で一斉に行うまでに発展した。
当施設にお住まいの方々にとっては、地元の子どもたちの登校を見送ることが最大の楽しみであった。街頭指導初日には、車いす姿のお年寄りがずらりと並んだ様子に戸惑いを見せていた子どもたちは、なかなかお年寄りに近づいて来ない。お年寄りも、どこかぎこちない。
しかし、日を追うごとに徐々に距離は縮まり、街頭指導最終日には何人かの子どもたちが乗り込んだバスから、小さく手を振ってくれたのである。4月とはいえ、海沿いのバス停に吹く風も朝の空気もまだまだ冷たい。毎朝そのような中、何枚も服を着こみ、帽子にひざ掛けといった防寒対策を取りながら、車いすで活動に参加されていた方々の喜びはひとしおであっただろう。

4　評価と今後の問題

これらの活動により、地域の福祉関係機関がさまざまな取り組みを行い、数々の成功体験の中から協働することの意義と、互いに高め合っていくことの重要性を学ぶことにより、そのことが地域福祉を充実させる一端を担うのだ、という役割を意識することができた。

自然災害により大きな痛手を受けながらも、だからこそ互いに支え合い、信頼し合える関係が大切なのだということを学んでいる。

今は、まだまだ通過点に過ぎない。地域の福祉関係機関といっても、まだ一部での活動にとどまり、関係機関が一つのまとまりをもって活動を進めていくまでには至っていない。そこには、それぞれの組織の考えや各施設で暮らす方々の生活があり、活動を重視することで、さまざまな影響を及ぼすことも視野に入れなければならない。

その一つひとつをどのように解決していかなければならないのか、それ以前に、どのようにして解決するための土俵に上げるのか、問題は山積しているように思う。しかし、それらのことに丁寧に向き合い、互いに持てる力を出し合うことで解決の糸口につないでいきたい。我々の道のりは始まったばかりであり、長く続いていく。

無理強いではなく、自らの思いの高まりの中から一つでも多くの機関の参加を得て、形あるものにしていきたいと考えている。これからも、多くの取り組みを通して、個々のスキルを上げ、福祉関係機関が「地域福祉の充実」という同じ目的に向かって努力と経験を積むことが、この地域に暮らす人々の生きる意義を追及する一助になるのだと信じ、努めていきたい。

そして、それは当施設で暮らす方々の、地域における役割づくりと存在意義の確立にほかならないと確信しているのである。